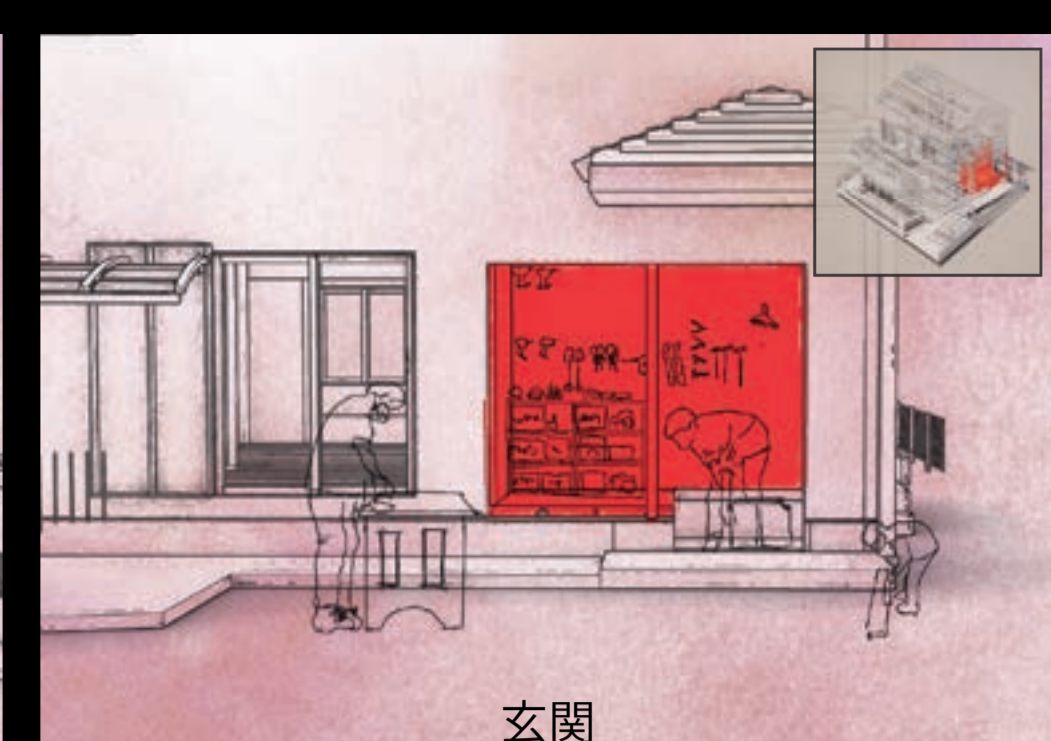
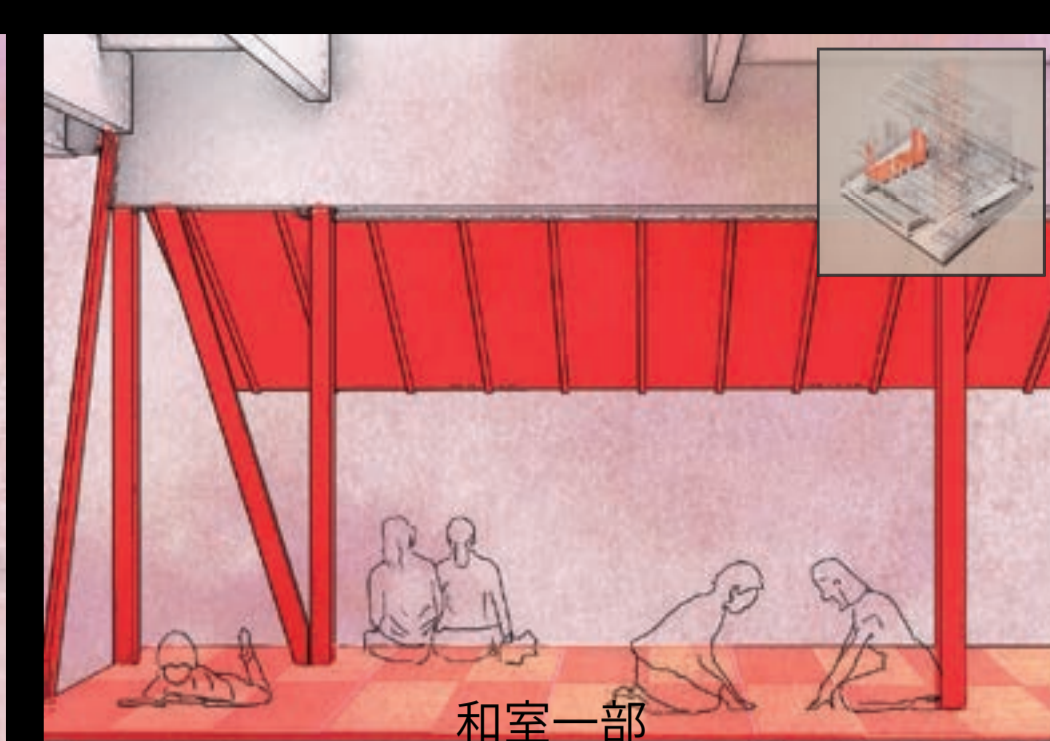


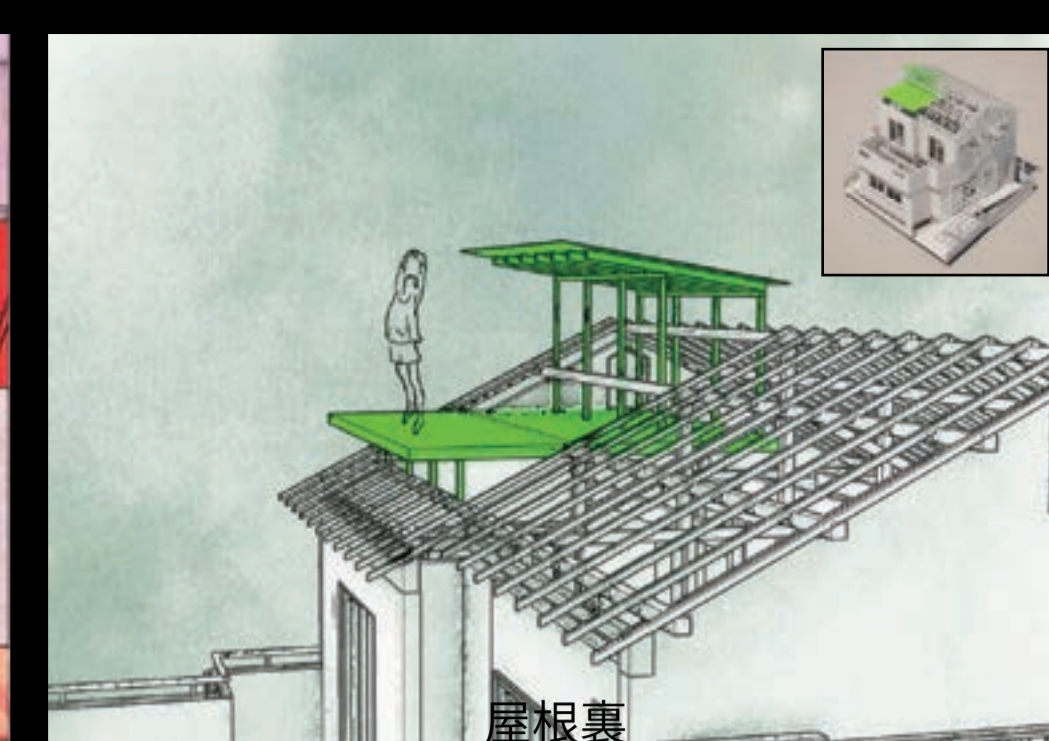
介護部屋



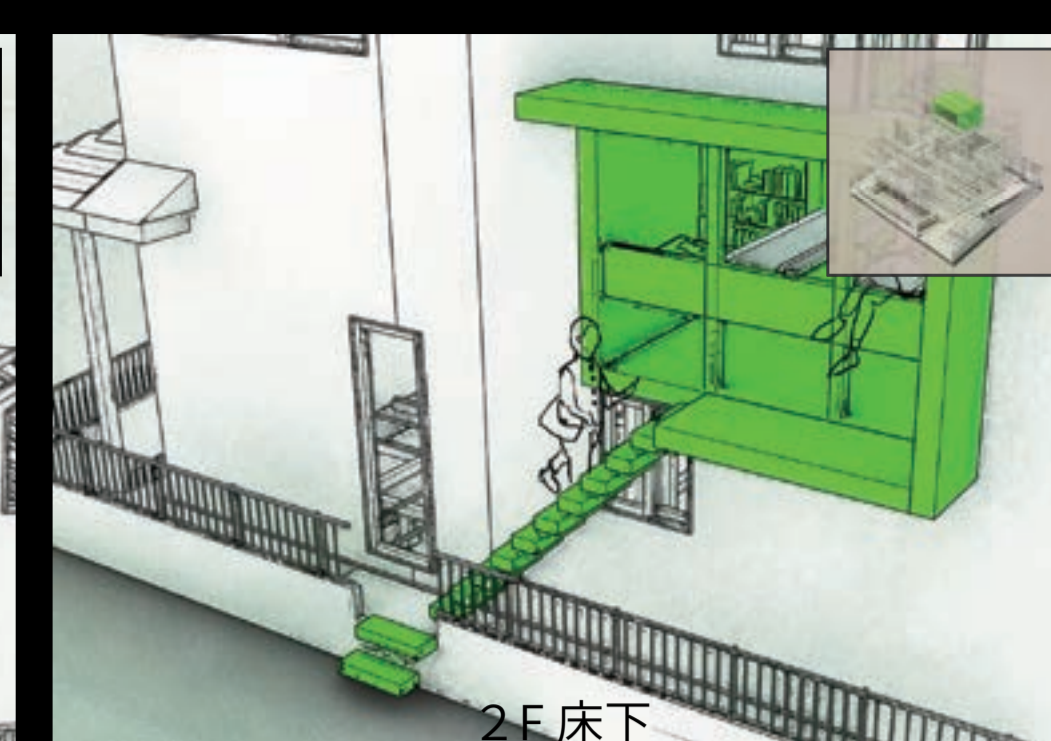
玄関



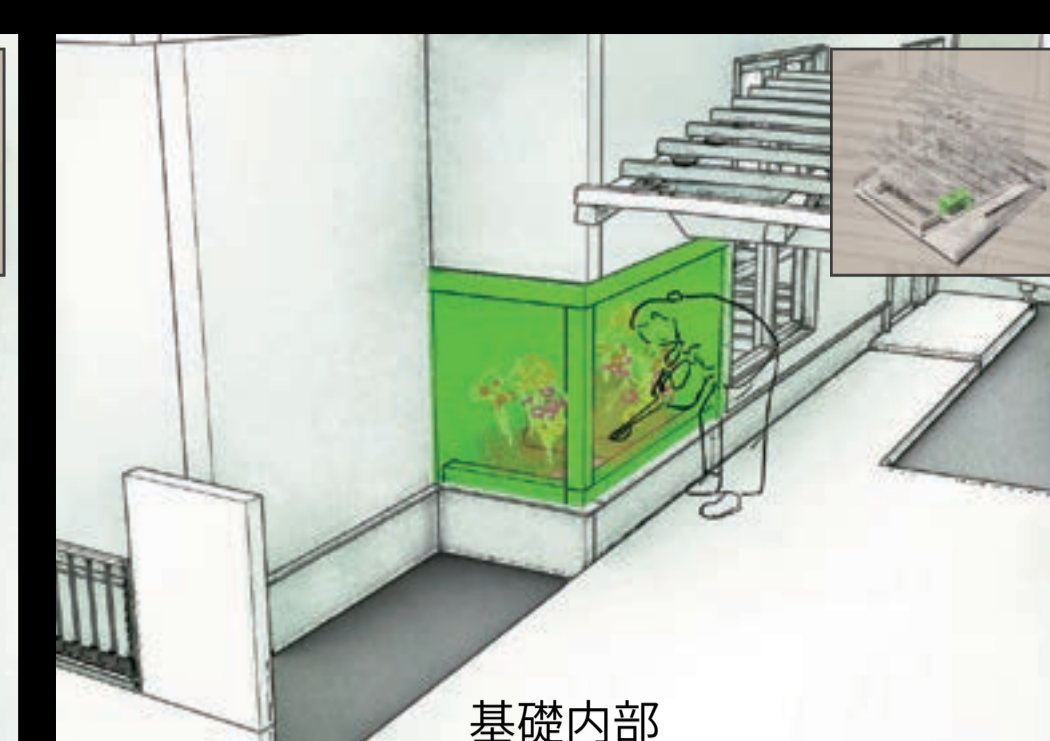
和室一部



屋根裏



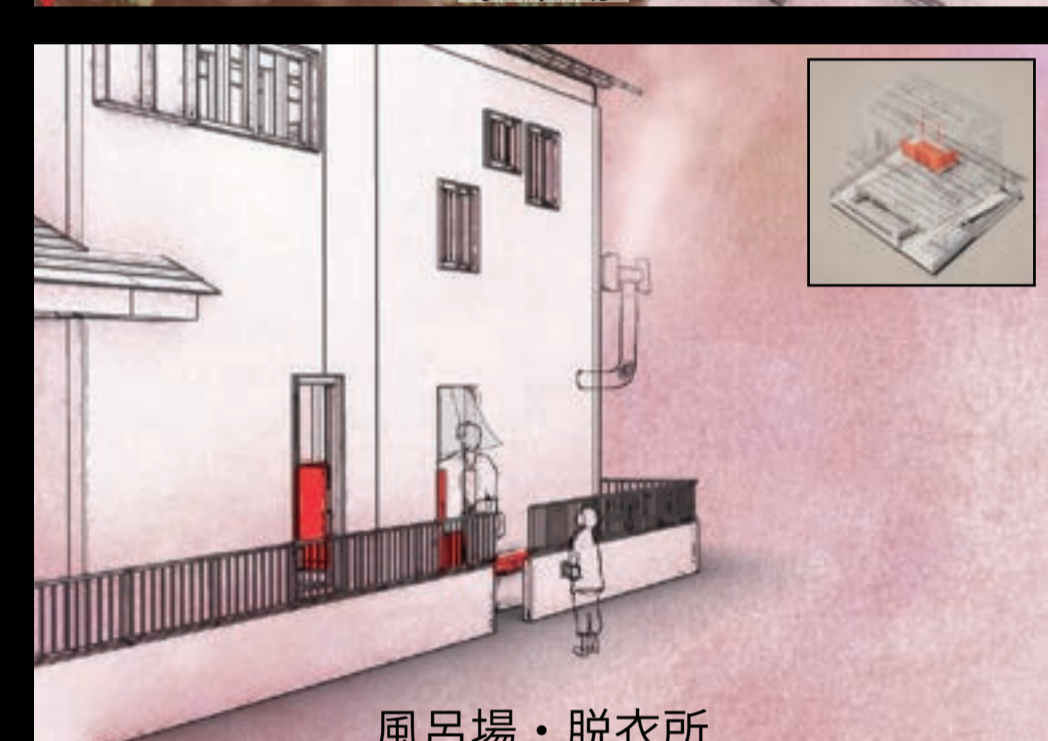
2F床下



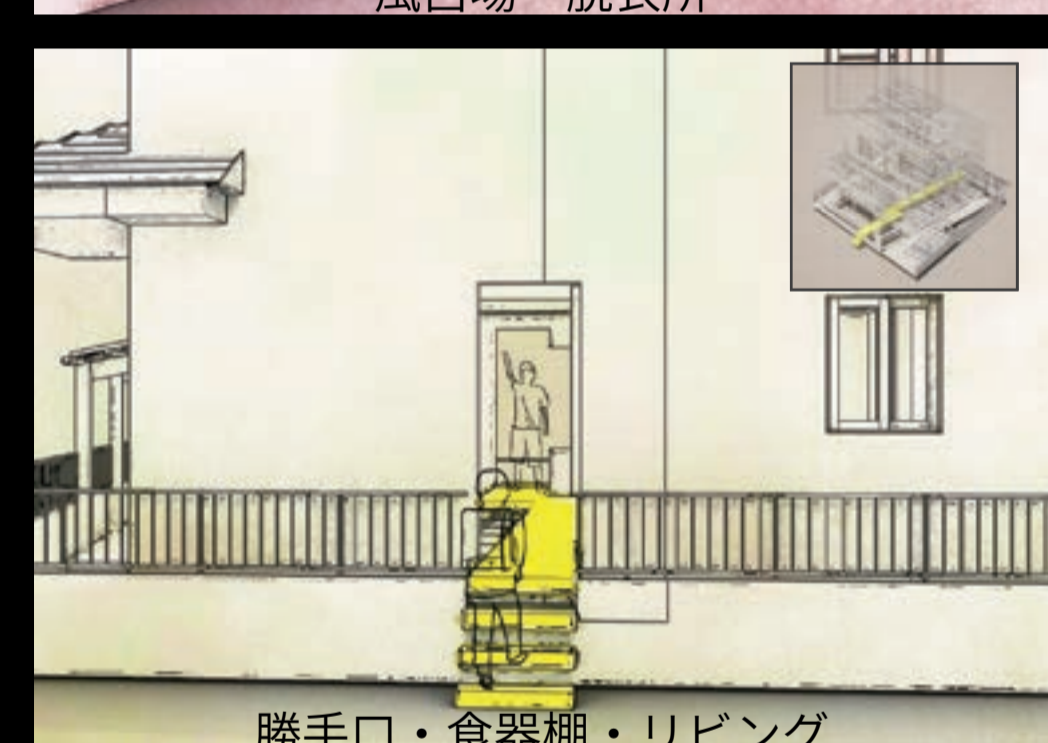
基礎内部



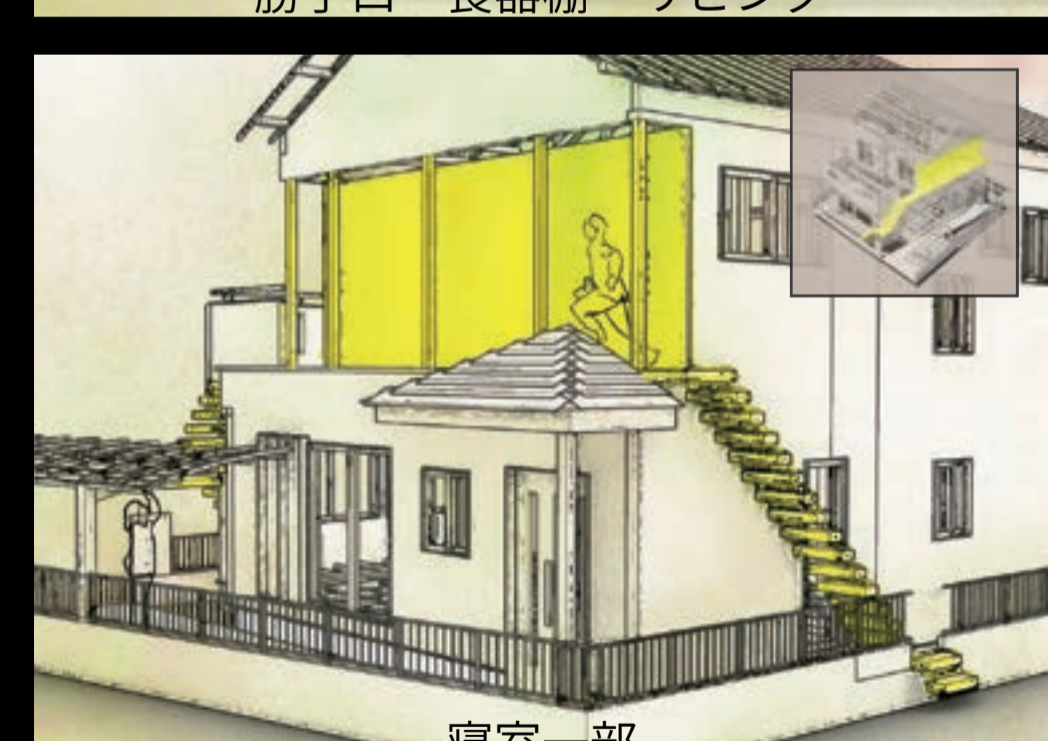
駐車場



風呂場・脱衣所



勝手口・食器棚・リビング



寝室一部



リビング・和室一部



この街を「ふるさと」にしたい。

ベッドタウンは急速な開発により、
所有という価値観が明確になり
人と家と街のつながりが希薄な傾向にある。

開発されるたびに
消えてゆく馴染みの場所。

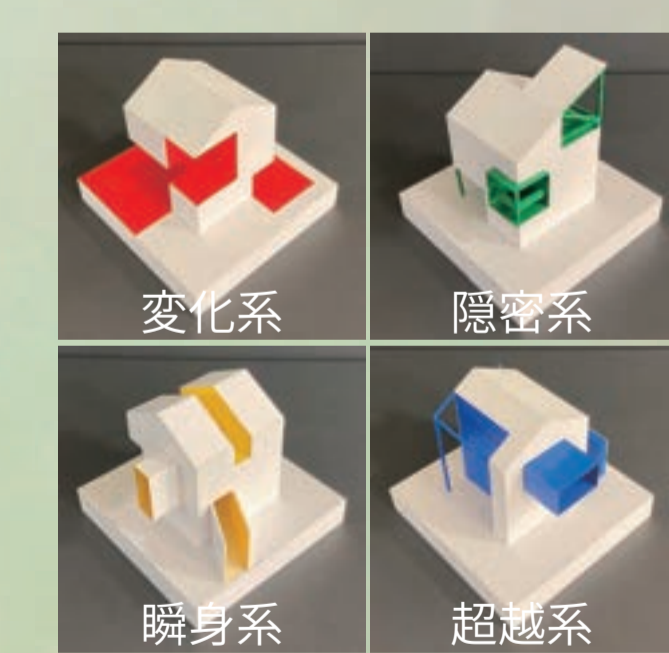
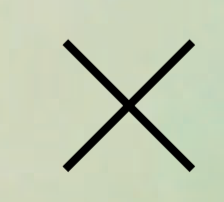
街の生活者の活動を観察し、
人と家と街をつなぐ依り所を
計画する足掛かりを提案する。

超能力環境トマソン

人・家・街をつなぐエスパーアーバニズムの提案



軸組み模型 S=1:30



変化系

隠密系

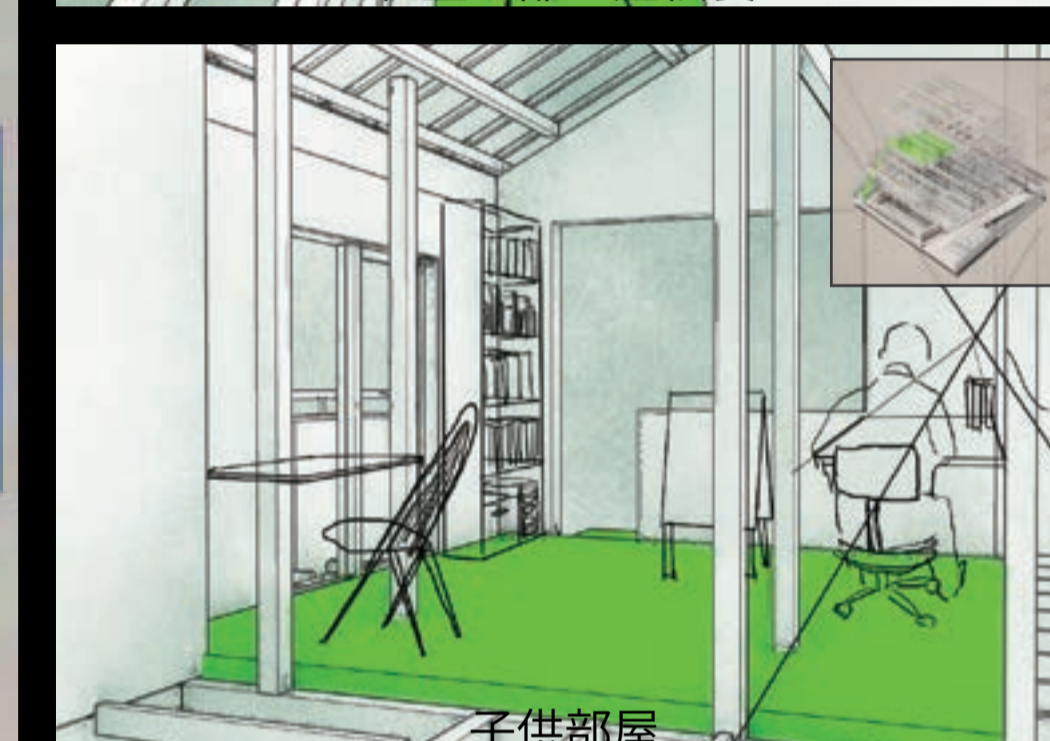
瞬身系

超越系

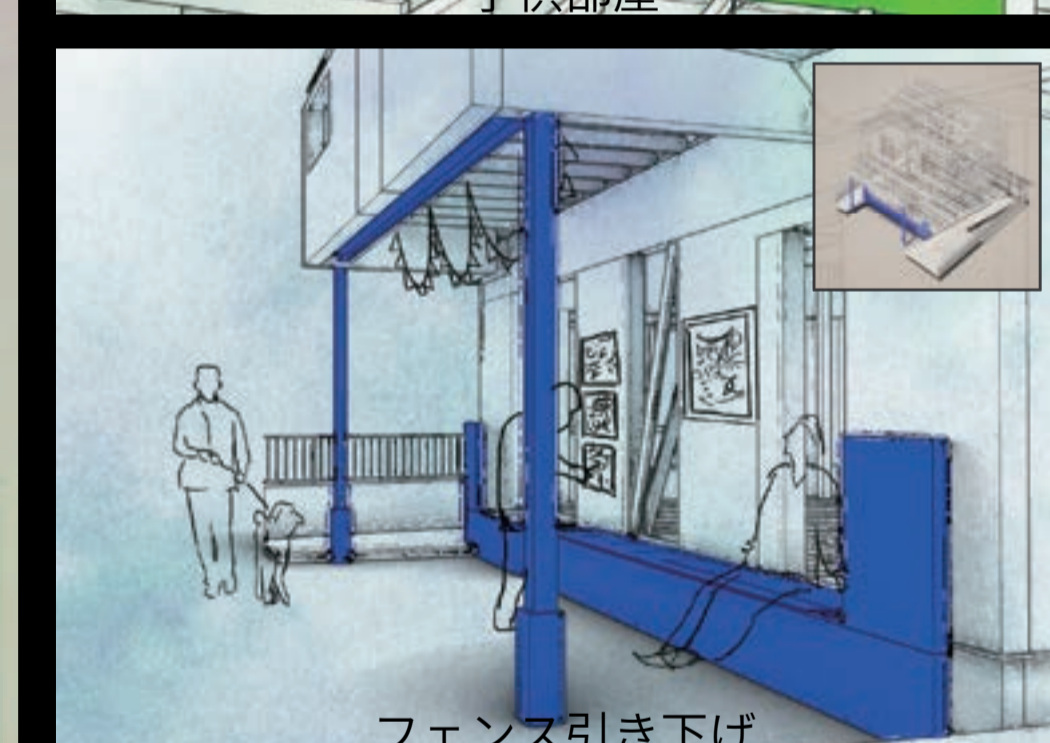
軸組み模型と超能力概念模型の掛け合わせスタディ



和室一部・屋根裏



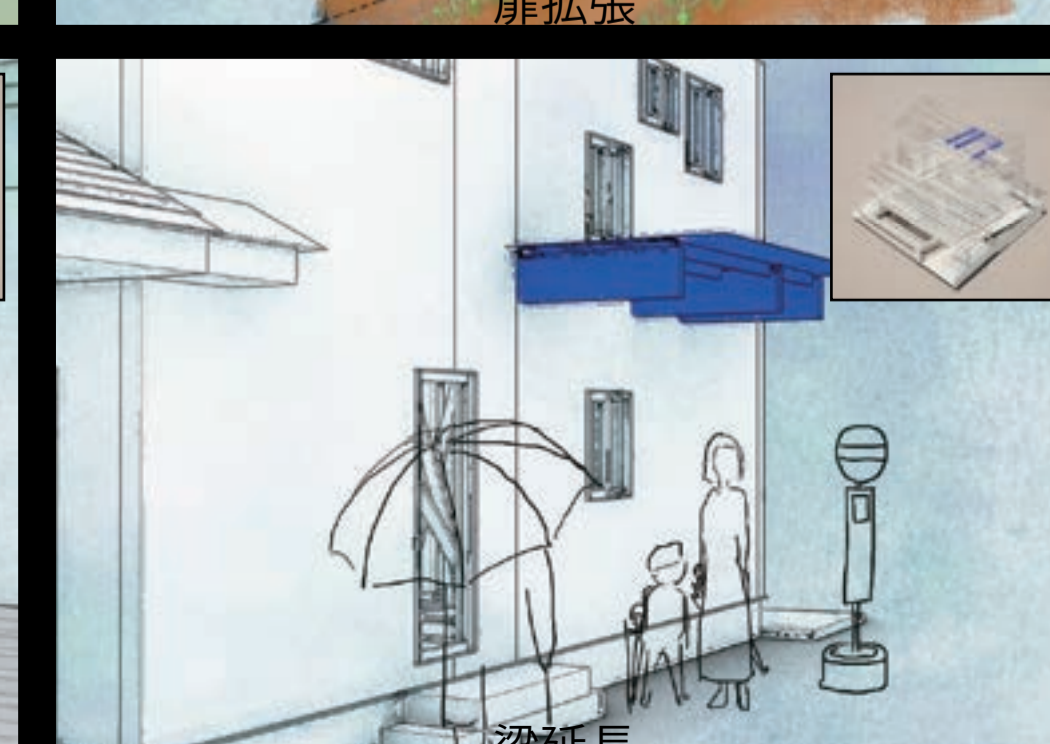
子供部屋



フェンス引き下げ



扉拡張



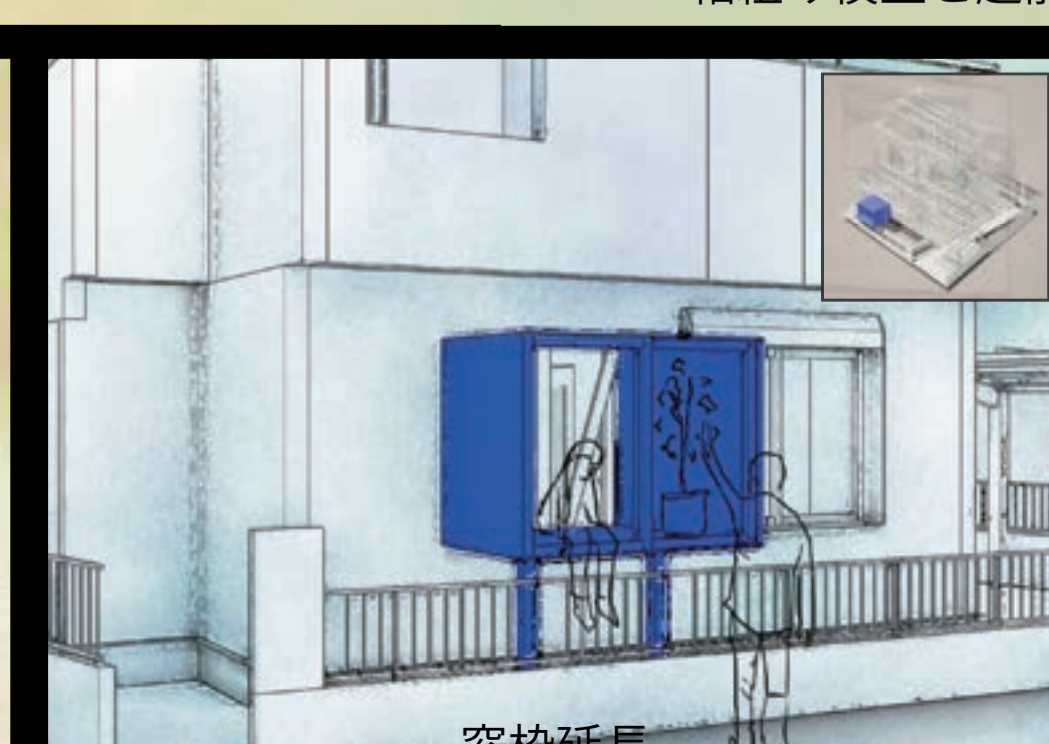
梁延長



2F部屋一部



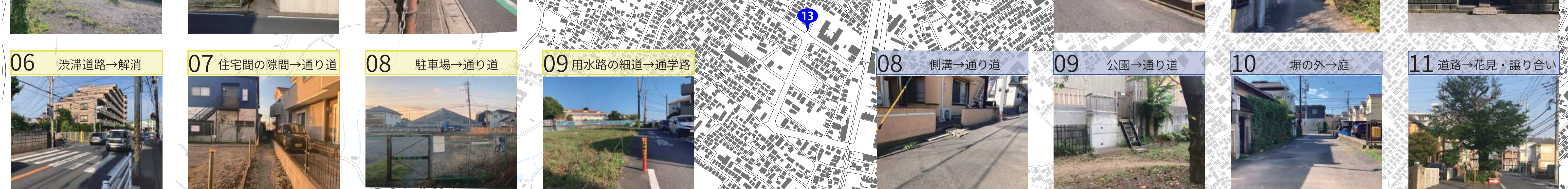
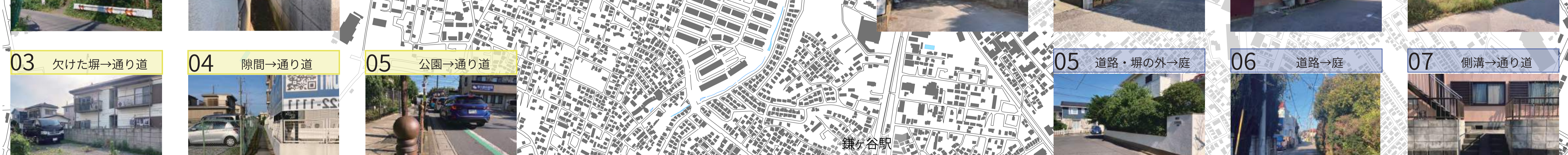
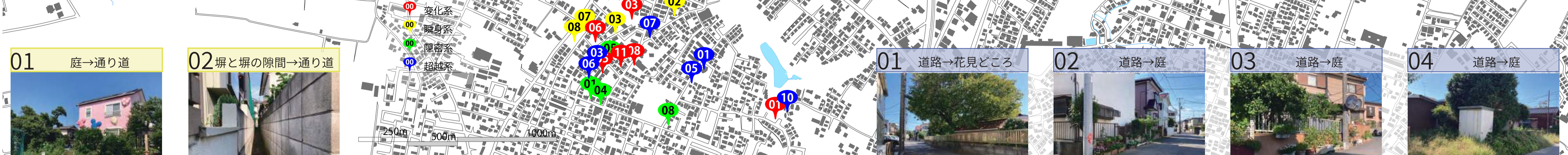
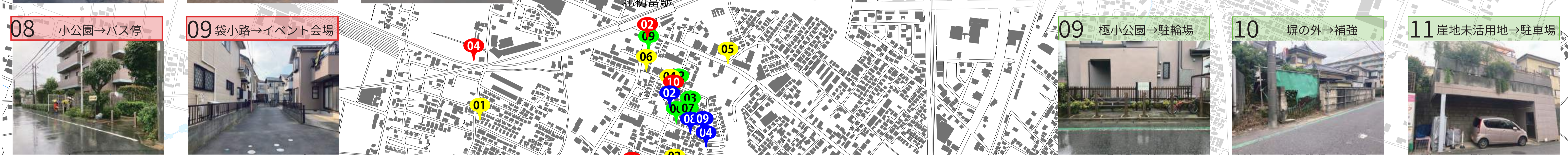
裏の通り道



窓枠延長

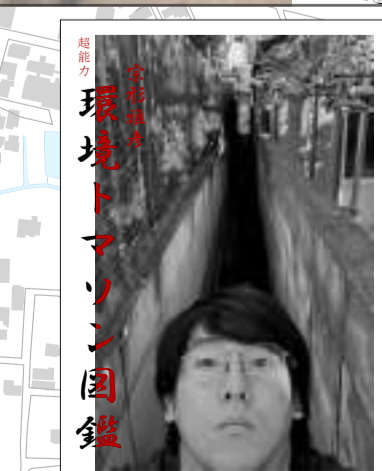


壁押し出し

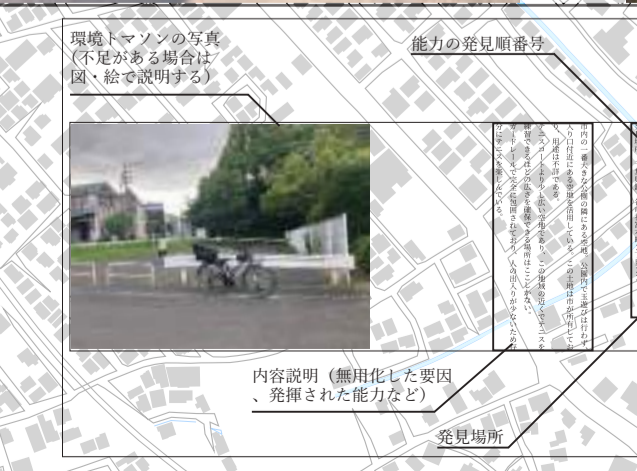


フィールドワーク

本研究では千葉県鎌ヶ谷市における宅地開発が進行した地域を対象とした。駅を降りるとすぐに住宅地が広がっており、そうした特徴を持つ北初富駅と鎌ヶ谷駅の2つに挟まれている地域である。徒歩で調査を行い、生活者が環境化させている現場や痕跡を写真に収めていく。生活者がどのような場を無用にとらえ、どのような機能を加えているのかを淡々と観察する。40事例の発見を通して、人と街の関係性が希薄なベッドタウンにおいて、環境トマソンはそれらをつなぐ唯一の依り所なのではないかと考察した。

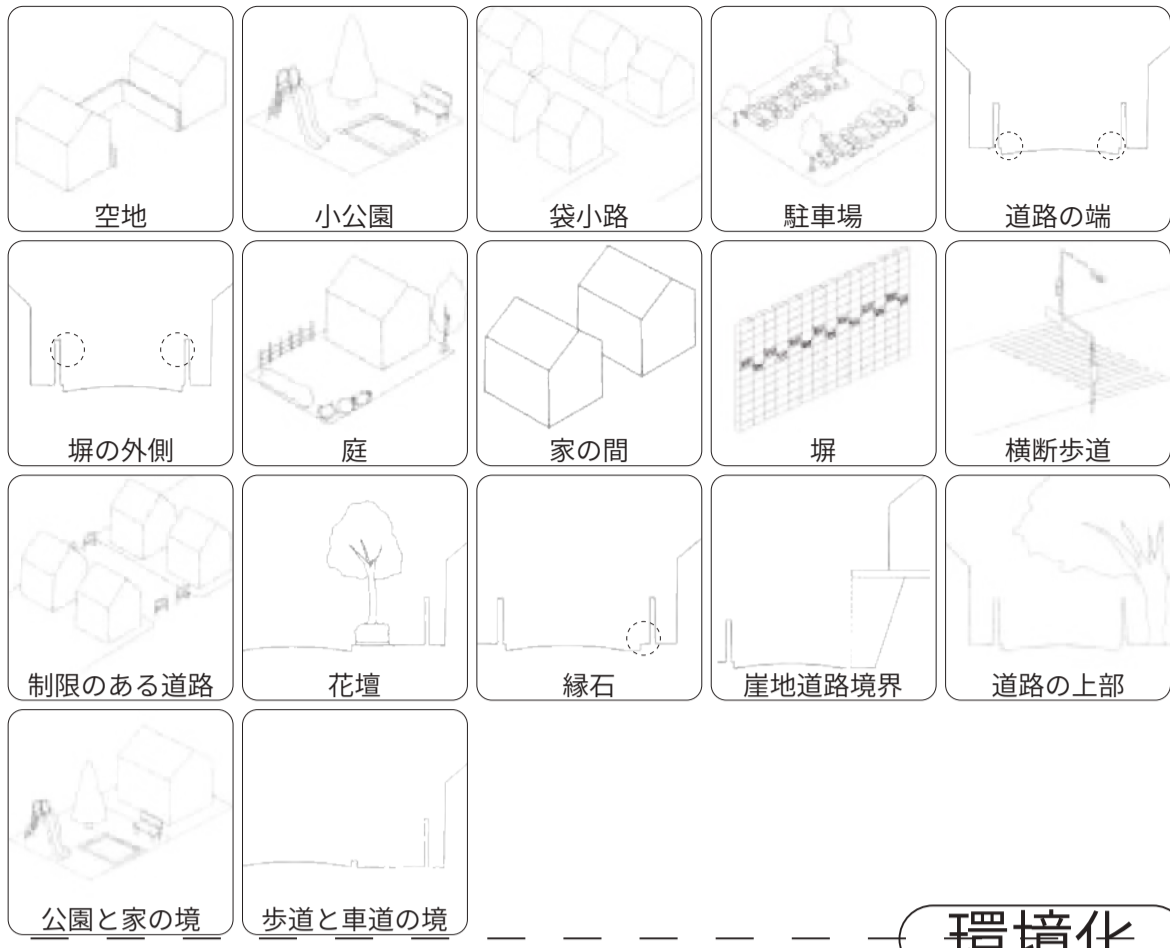


<超能力環境トマソン> 自著



街

<無用>



<発想>

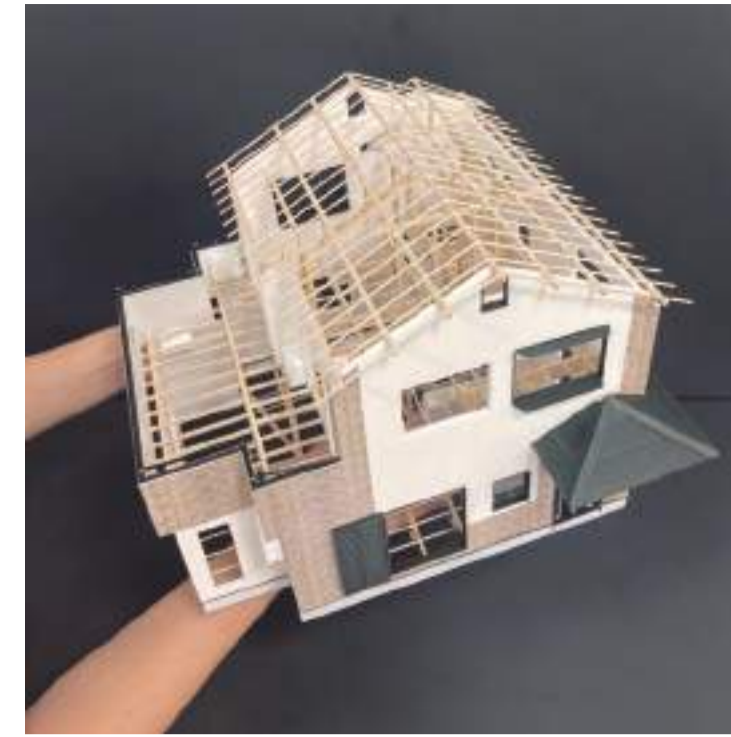
- テニスしたい
- サッカーしたい
- ゲートボールしたい
- 花見したい
- ゴミを集めたい
- 犬を走らせたい
- 待ち合せしたい
- イベントしたい (花火・BBQ など)
- 近道したい
- 手助けしたい
- 物を置きたい
- 草刈りたくない
- 告知したい
- 宅配を受け取りたい
- 駐車・駐輪したい
- 補強したい
- 安全に通りたい
- 庭を拡張したい

人

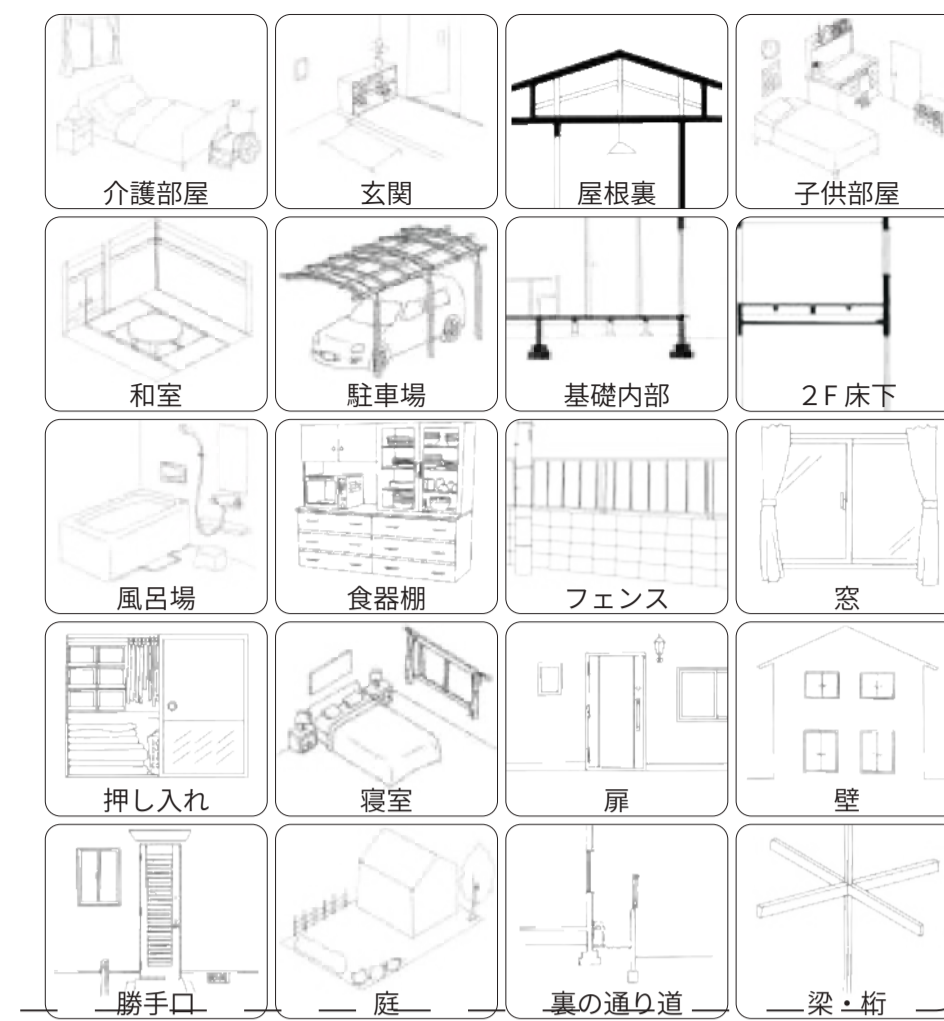
環境化



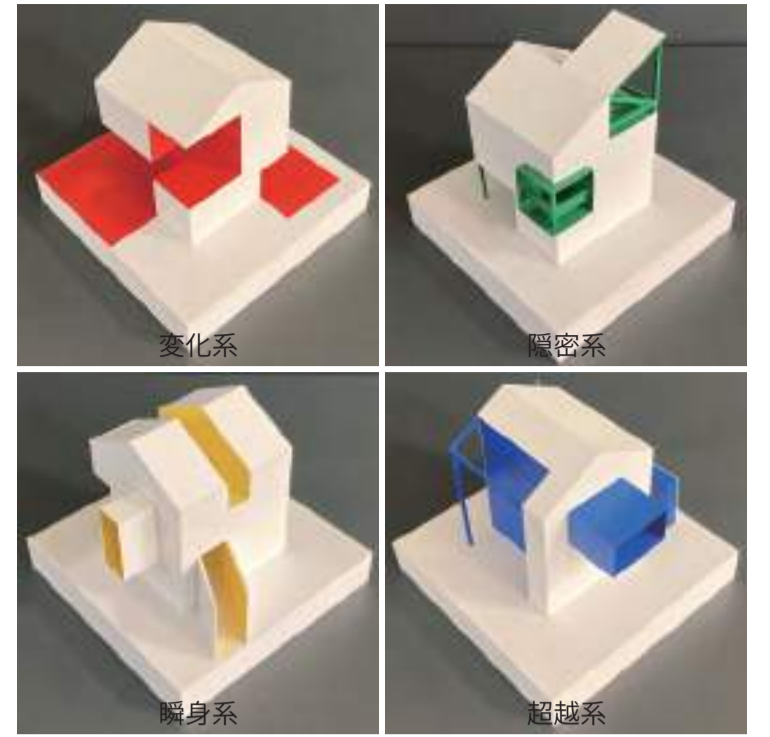
<無用観察>



1/30 軸組み模型

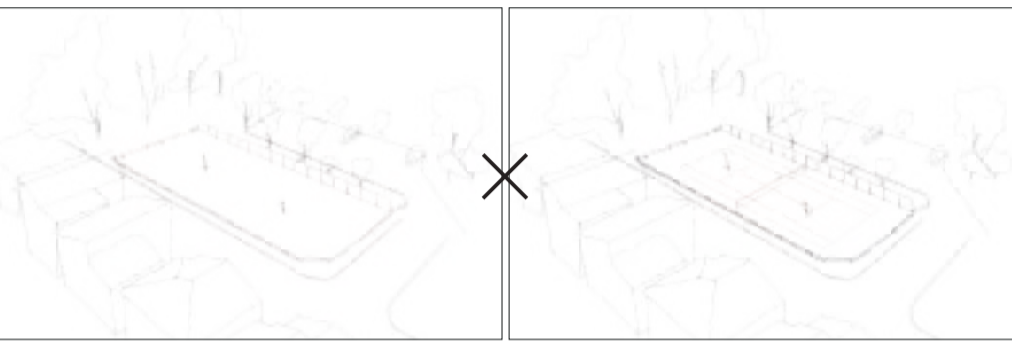


<能力操作>



超能力概念模型

×



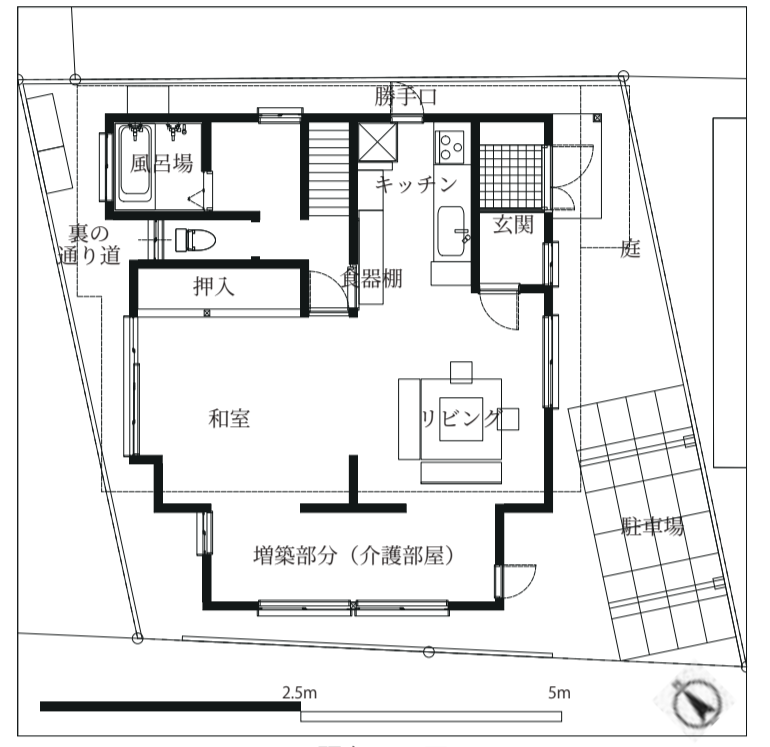
<無用 (空地)> × <発想 (テニスしたい)>

テニスをしたと思う
↓
テニスに適した無用の発見
↓
実現させる

実現 (環境)



ベッドタウンの一般的な住宅

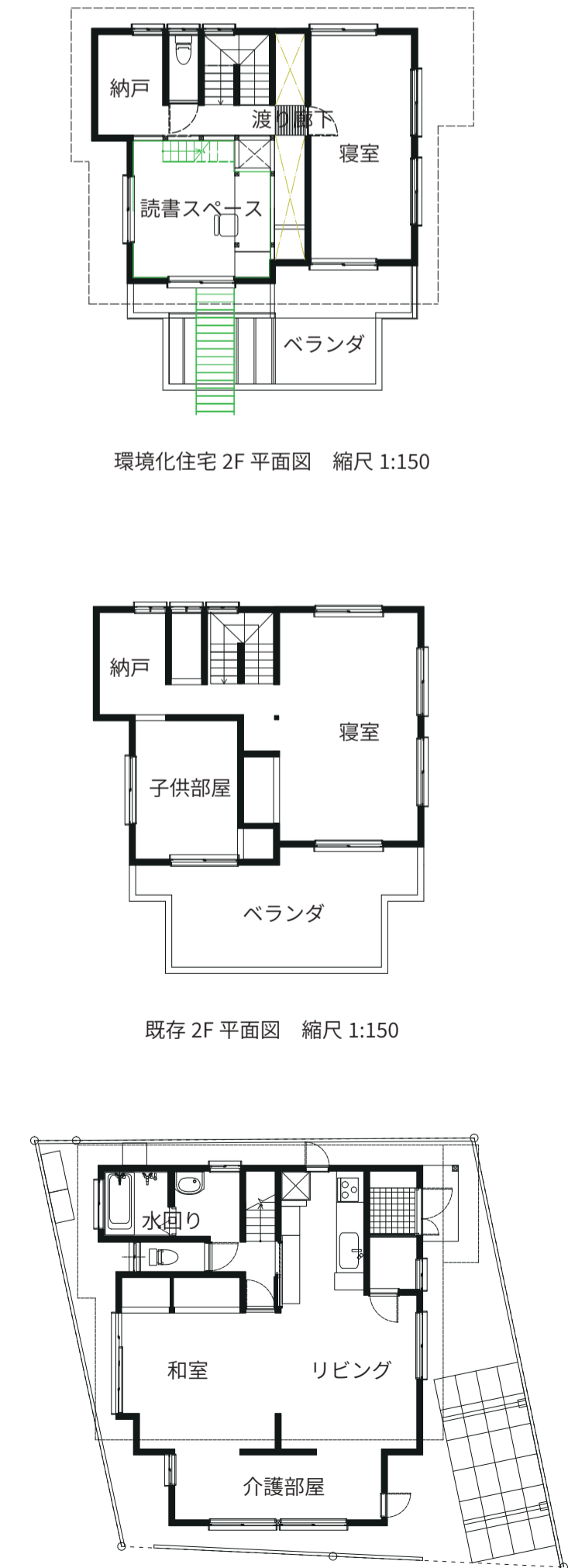
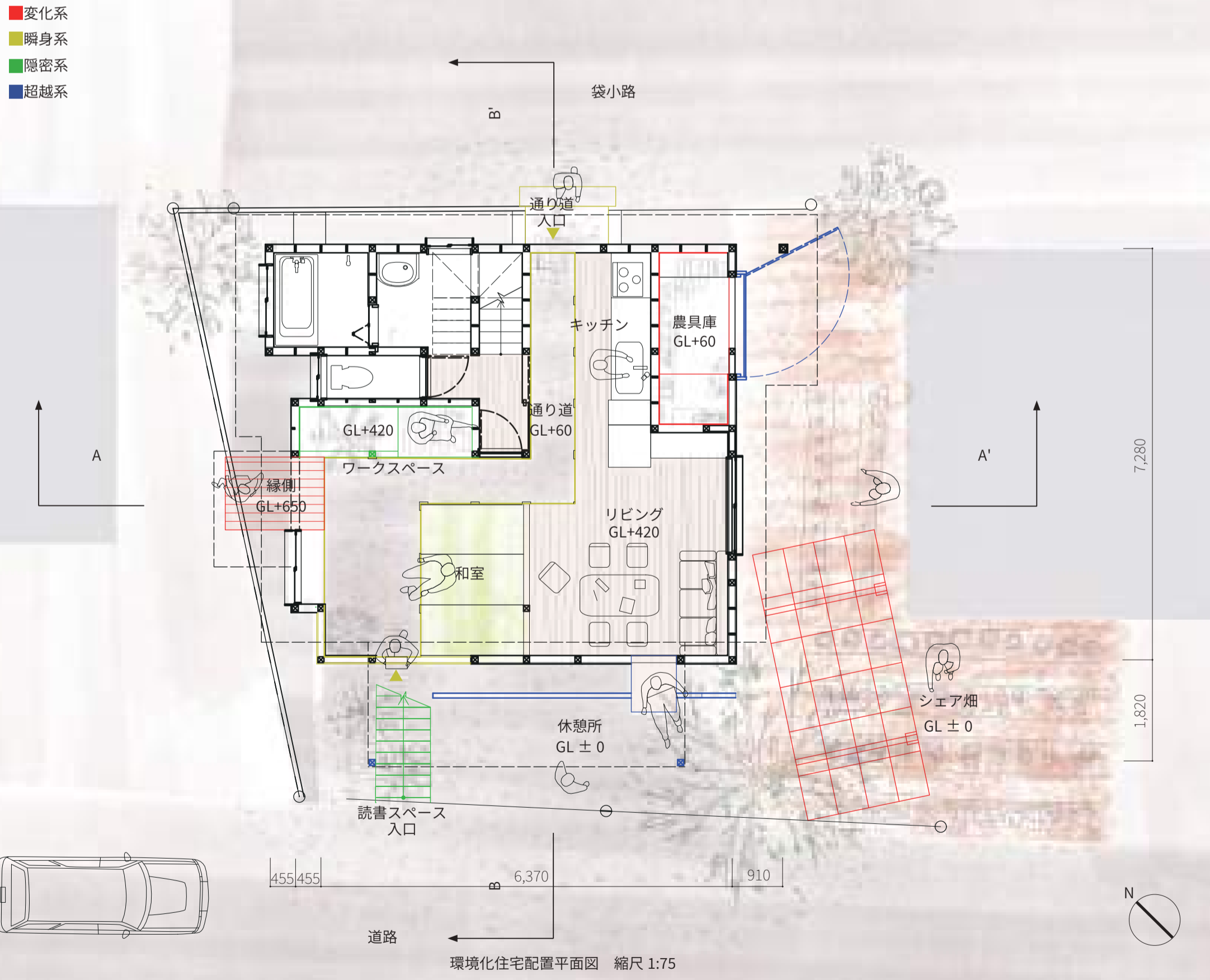


環境トマソンの発見

違和感のある場所は赤瀬川源平によって提唱された「超芸術トマソン」の無用の概念に該当する。また、その中に生活者が介入することによってトマソンが対象物から環境に変化している事例が数多く発見された。そうした場は様々な生活者の小さな経験が蓄積されており、生活者の馴染みのある場としてのポテンシャルを有している。ベッドタウンは同時多発的な開発により形成されているため、無用の場が多く存在する。生活者にとって無用の場は入居時から日常的に存在しており、無意識に欲求を実現するために環境化を行っている。このような生活者が無用な場に機能を付加することで環境化させている場を「環境トマソン」と命名し調査・分析を進める。

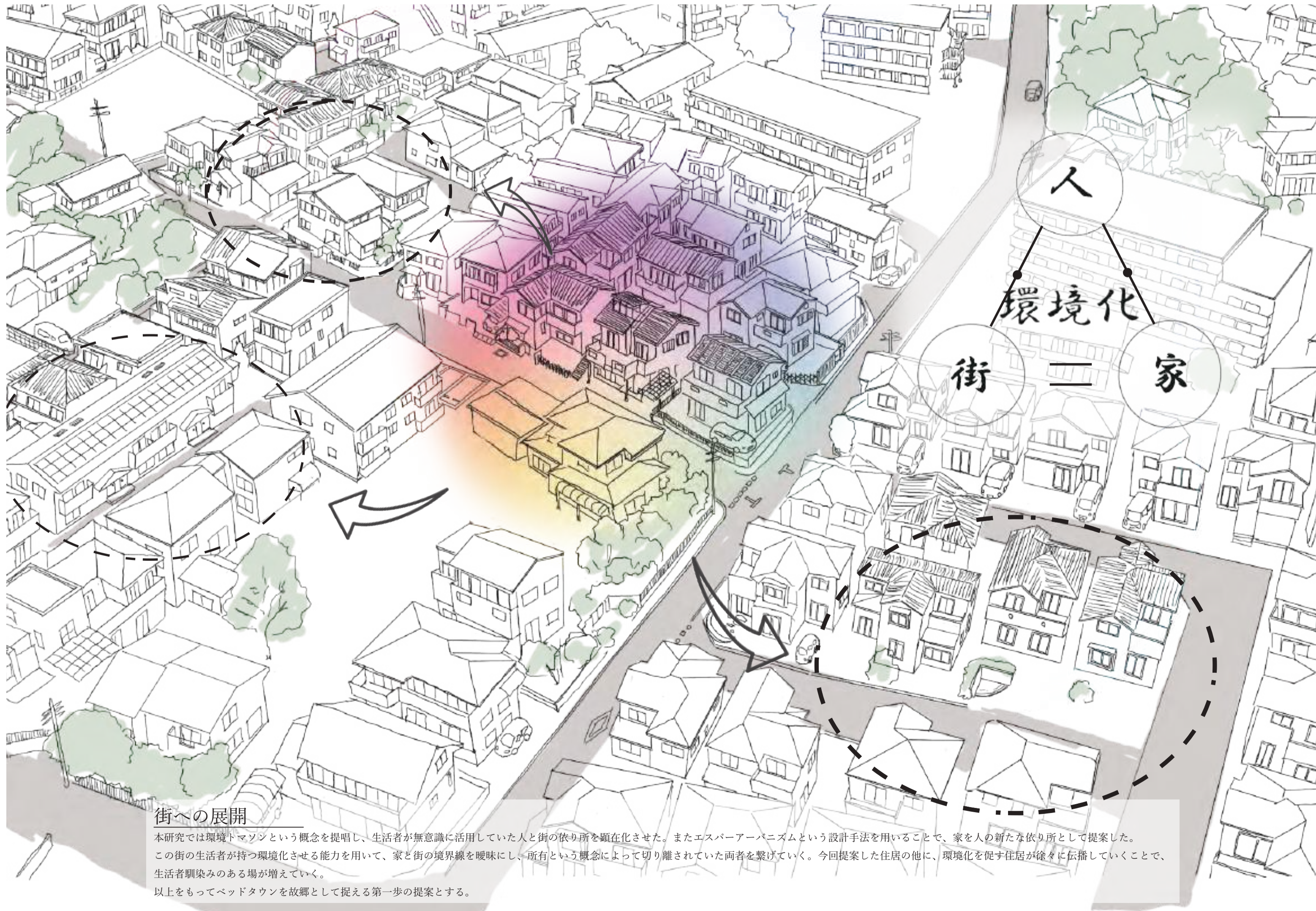
設計対象地

本提案ではベッドタウンに付む一般的な住宅一棟を対象に検討を行っていく。その住宅に4つの能力をすべて踏襲した計画をサンプルとして提示することにする。住居の無用な場を発見するため対象住宅の変遷調査や観察を行う。さらに住人の将来の展望と街の生活者が無用の場に対し付加する機能の擦り合わせを行いながら設計を進めていく必要がある。無用の場の環境化を促していく形態スタディを行う中で、住宅の細部まで把握が必要であるため、軸組み模型を採用した。



所有区分の解放

人と家の依り所を計画するために、所有区分を明確にしている隣地境界線や道路境界線に着目する。各境界が面する場の特徴を考慮し、街の生活者や近隣住民が環境化の手がかりを計画する。住宅内部を環境化させる計画をする際は、街の生活者と人の関わり方に注意する必要がある。

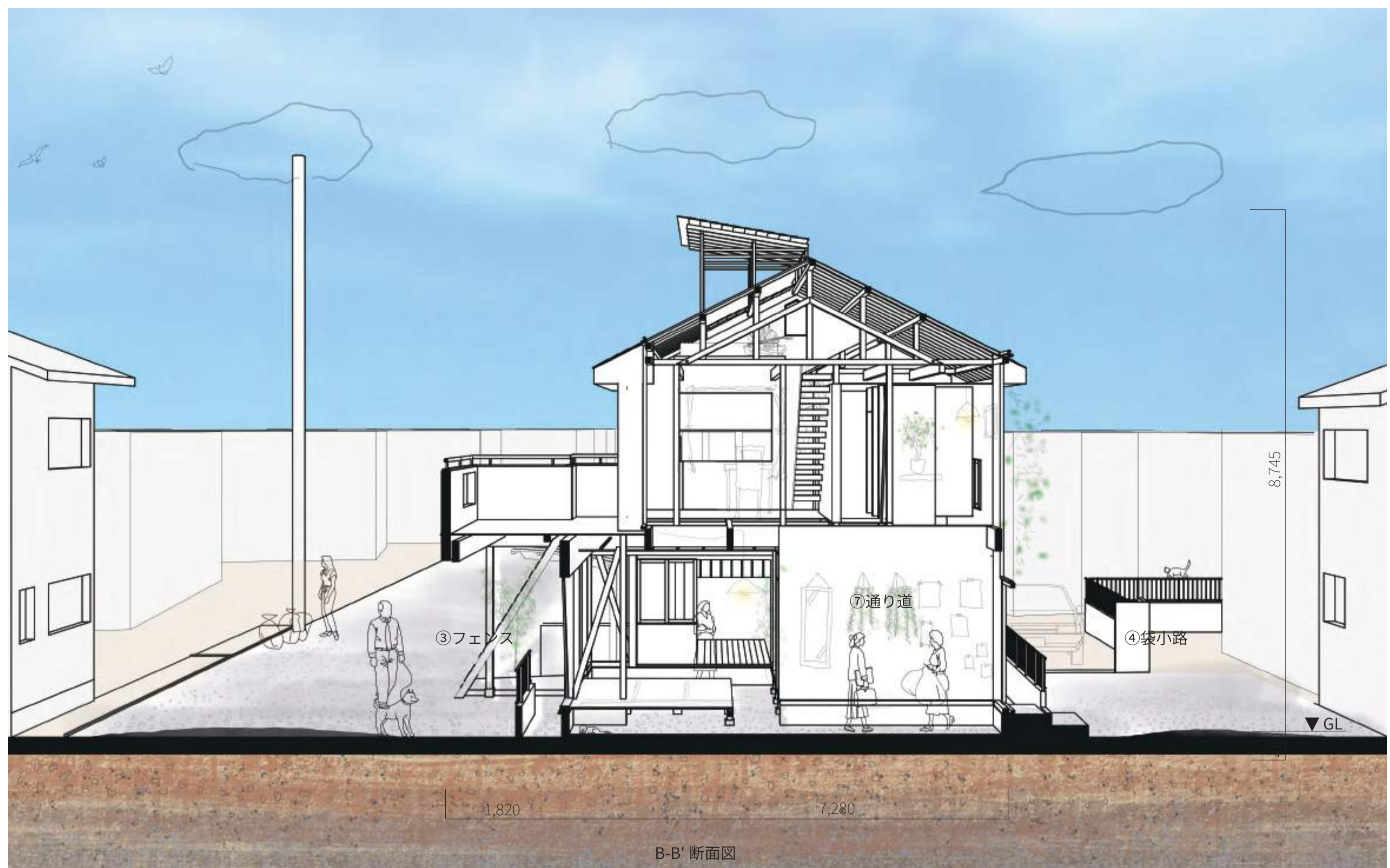


街への展開

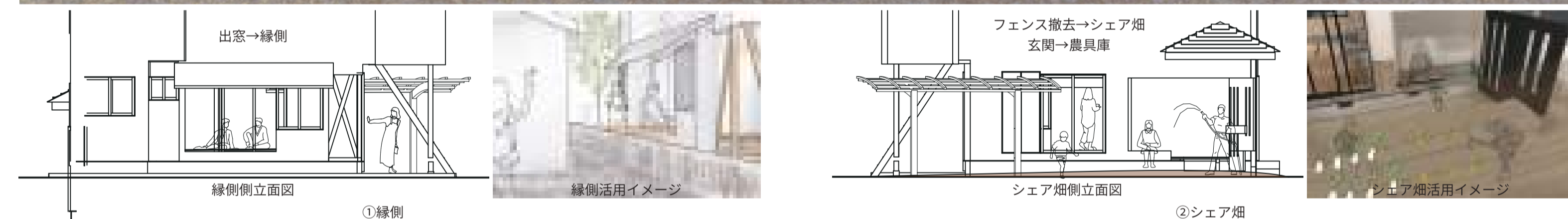
本研究では環境トマソンという概念を提唱し、生活者が無意識に活用していた人と街の依り所を顕在化させた。またエスパー・アーネストムという設計手法を用いることで、家を人の新たな依り所として提案した。この街の生活者が持つ環境化させる能力を用いて、家と街の境界線を曖昧にし、所有という概念によって切り離されていた両者を繋ぎたい。今回提案した住居の他に、環境化を促す住居が徐々に広播していくことで、生活者馴染みのある場が増えていく。以上をもってベッドタウンを故郷として捉える第一歩の提案とする。



A-A' 断面図



B-B' 断面図

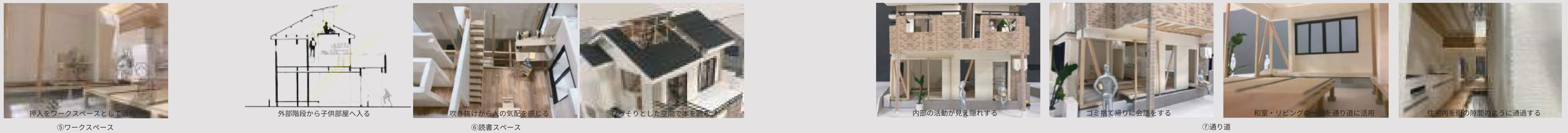


隣地境界線の環境化

隣地境界線付近はフェンスが引かれており日常的に活用される場ではない。そうした無用の場を活用し、住民と隣人から始まる共有スペースを計画する。
 ①隣地境界のフェンスを活用して出窓から縁側を展開する。初めは隣人と住人の共有の縁側として活用され、近隣住民が少しずつ利用するようになると地域の休憩所としての機能を持ち始める。
 ②隣地境界のフェンスを撤去し隣人の共通の趣味である畑仕事が行えるシェアスペースを計画する。玄関としての役割を失った空間を農具庫としての機能を与え、周囲の畑好きが用具を取りにこの場に集う。

道路境界線の環境化

道路境界線付近は観察・ヒアリングを通して環境トマソンが存在していることが分かった。境界線を曖昧にする操作に加え、環境トマソンの現状の関係を考慮して計画していく必要があった。
 ③フェンスの道路側は立ち話や駐車スペースとして活用されていた。そうした特徴を考慮し、無用となった介護部屋の面積削減し、フェンスをセットオフする。住人の個性が外部に溢れ出すと共に、休憩スペースが街に生まれる。
 ④この袋小路では近隣住民の関係が良好であるため、定期的にBBQや花火大会が開催されていた。袋小路に面した近隣住民を対象に毎朝のゴミ捨てをショートカットできる通り道を通す。利用されていなかった勝手口を通り道の入り口とし、その付近や住宅内部でいつもの挨拶や何気ない会話が生まれる。



住宅内の環境化 I

街の生活者と住人の関係性を考慮し、無用の場が環境化されるような計画を行っていく。
 ⑤住宅内を貫通している通り道に面している押入は、生活者と住人が共同で使えるワークスペースを前提に計画する。いつもと違う場所で作業したくなったり、誰かと会話しながら作業したい人にとってついでである。
 ⑥子供が巣立ち空き部屋になった子供部屋は、住人の好きな本が取まった本棚がぽつんと置いてある。この無用の空間を地域の不要になった本が集まる場所として計画を進める。非生活空間である屋根裏部屋と繋ぎ、吹き抜けを通じて上下の生活の気配は感じつつも、隠れ家のような読書スペースが生まれる。

住宅内の環境化 II

袋小路に面した近隣住民を対象に、毎日のゴミ捨てやちょっとした買い物の際にショートカットができる道を通す。住宅内の通り道は、夫婦2人暮らしには広すぎるリビングや和室の一部を利用することや、キッチン周りの大きすぎる棚を適性の規模に調整することで面積を確保した。各部屋を縫うように通した道は家と街の境界を内部に引き込み、生活者による環境化を誘発させる。

